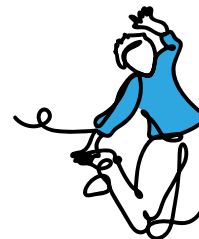




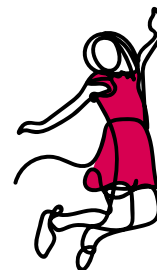
令和 6 年度 独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業



「がん患者とその家族が参画する
金沢がん共生まちづくり 3.0」



報告書



がんとむきあう会は、医療者やピアサポーターが常駐する患者・家族の居場所「元ちゃんハウス」で毎日活動しています。がんといわれて思い描いていた生活ができなくなったり、たとえ治癒したといわれても、がんになる前と同じ自分には戻れないと受け入れざるを得なかったりする人があります。でもその人たちも顔を上げて自分の力を信じて前へ進むのです。そんな人たちが決して孤立しないように、傷つくことがないようにと願います。がんと共に生きる人が当事者として社会参画し、職場や地域の中で自分らしく暮らし続けるために、今年一年「金沢がん共生まちづくり3.0」の事業を展開してきました。その中で決して患者さんだけが当事者ではないことにも気づきました。受け入れる側の職場など地域にもがんにかかわる人たちがいて、そうした人たちの対応に戸惑ったり無知であるがゆえに手を差し出せなかったりすることもあります。お互いに支えあうことが必要です。学びあうことが必要です。一言に当事者といっても本当に人それぞれです。一步の幅も速さも人それぞれです。やはり個別性が大切です。一人ひとりを大切にしたいうえで生活の場での他者との繋がりが大切だと痛感します。がんとむきあう会は9年間ぶれずに場を作り続けてきたからこそその人のつながりを再認識しました。そして次は成果を元に県内・県外の広域的ネットワークを構築したいと思っています。一步前へ出るのは私たちの番です。

**だれもが当事者であると認識することが
活動を一步前に進める。**

がんとむきあう会 理事長
西村 詠子



がんとむきあう会とは？

石川県金沢市と近郊に居住、通院するがん患者とその家族、遺族など、がんに影響を受ける人たちを対象に、行政や病院が取り組むがん患者の支援施策を補完することを第一に、制度の狭間になってしまう人たちや施策につながらず孤立しがちな人たちを支援することを目的に、金沢で活動する医療者や市民が中心となり全国に協力を呼びかけ、行政と病院、民間が一体となったがん共生まちづくりの推進に資するために設立された。

金沢市と金沢医療センター及び金沢大学附属病院とそれぞれ三者協定を締結し、通院や買い物などのついでに立ち寄れる至便な地に地元企業から建物の無償貸与を受け、医療者やピアサポーターが常駐する常設の無料の相談の場「元ちゃんハウス」を2016年12月に開設以来、2000日開館、来館者13500人、5600件の相談を受けてきた（2024年12月末）。



2016年12月：金沢市、独立行政法人国立病院機構金沢医療センターと三者協定を締結（左）

2018年1月：金沢市、国立大学法人金沢大学附属病院と三者協定を締結（右）

2016.12 ~ 2024.12



2000 日 開館

13500 人 来館

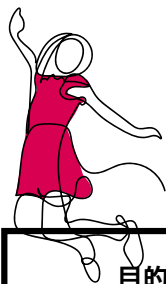
5600 件 相談



【難病患者・がん患者等の活躍や様々な活動への参加等を支援する事業】

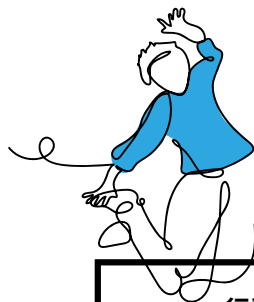
がん患者とその家族が参画する金沢がん共生まちづくり 3.0

金沢のまちに暮らすがん患者とその家族が、各自が持っている経験や知識、能力、特技、希望などを活かして、地域の多様な場で活動に参加したり、就労したりすることで活躍ができる「社会参加」を広く推し進めることを目的に、がん患者とその家族と地域の団体や組織、企業が、それぞれが抱える課題やニーズを共有して、ともに考えながらアイデアを出していく常設の学びの場 `ようこそ、カレッジを設けることで、それぞれのニーズのマッチングと実際のがん患者やその家族の活動参加や就労を生み出し、地域全体としてがんと共生できる金沢のまちづくりに取り組んでいく事業。



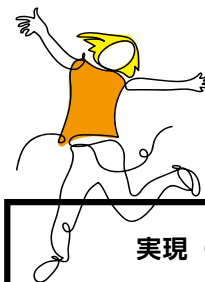
目的（何のために）

金沢のまちに暮らすがん患者とその家族が、各自が持っている経験や知識、能力、特技、希望などを活かして、地域の多様な場で活動に参加したり、就労したりすることで活躍ができる「社会参加」を広く推進することを目的に、



行動（何をして）

がん患者とその家族と地域の団体や組織、企業が、それぞれが抱える課題やニーズを共有して、ともに考えながらアイデアを出していく常設の学びの場〴〵ようこそ。カレッジを設けることで、



実現（どうする）

それぞれのニーズのマッチングと実際のがん患者やその家族の活動参加や就労を生み出し、地域全体としてがんと共生できる金沢のまちづくりに取り組んでいく事業。



わたしたちが直面して いる7つの課題



個々の課題は独立したものではなく密接に関わり合うものである。
根底には我々を含めて行政や病院等のサービス供給側が捉えるがん患者と
その家族の像と実際とのズレがあることを強く認識している。

7つの課題において前提となるのはこれまでの医療の文脈だけの支援には限界があることである。第4期がん対策推進基本計画では医療側の参画が必須であり、多くの医療者の活動と支援によりがん共生社会の下地が築かれてきた。その下地からこれからを見据えたときそこに重ねるべきは「生活」という新たな文脈である。「患者」から「生活者」への視点のシフトである。求められる施策は生活の場たる地域におけるさまざまな役割や立場の団体や組織との連携だと考える。



新たながん患者の支援システムを
金沢のまちにつくり出していく。

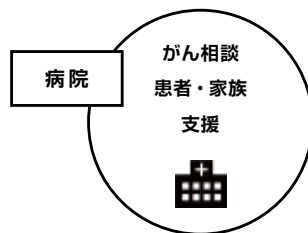


金沢がん共生まちづくり **3.0**



3.0 とは？

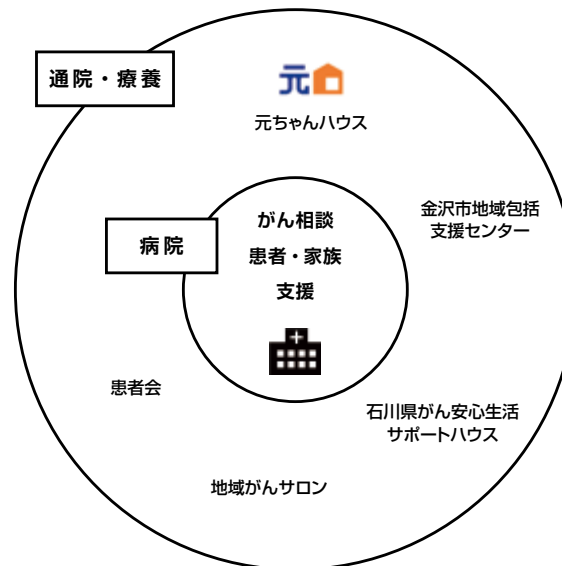
1.0



「病院」エリア

がん診療拠点病、がん診療連携協力病院、
がん診療連携推進病院の相談支援センター

2.0

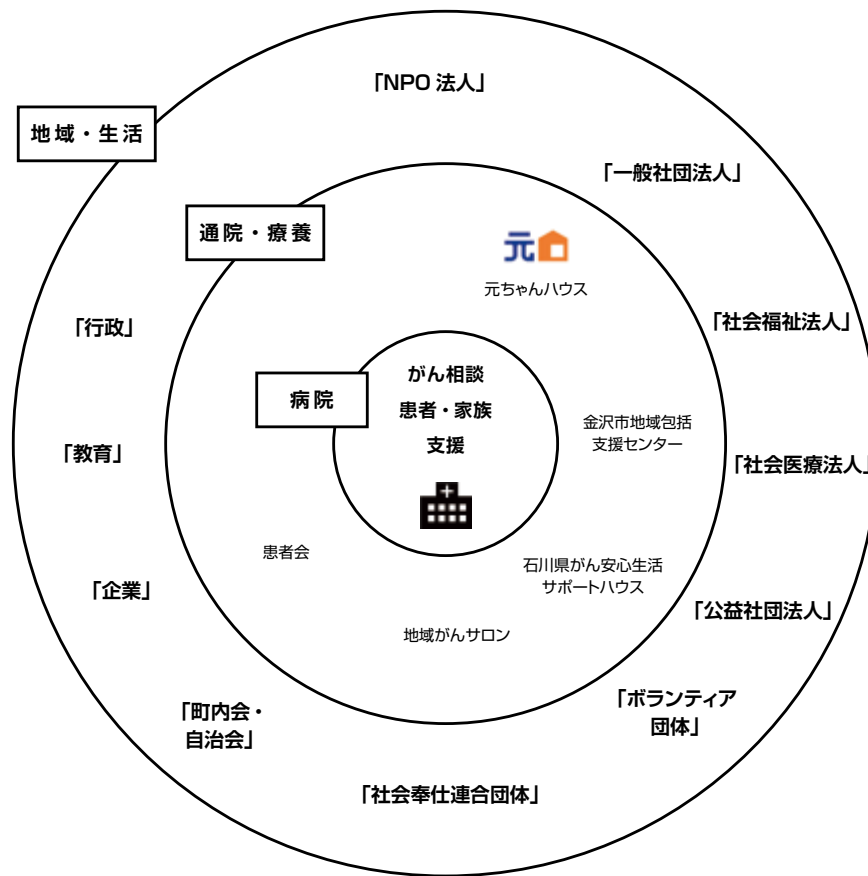


「病院」＋「通院」エリア

医療及び患者・家族が提供する場

医療のアプローチ

3.0

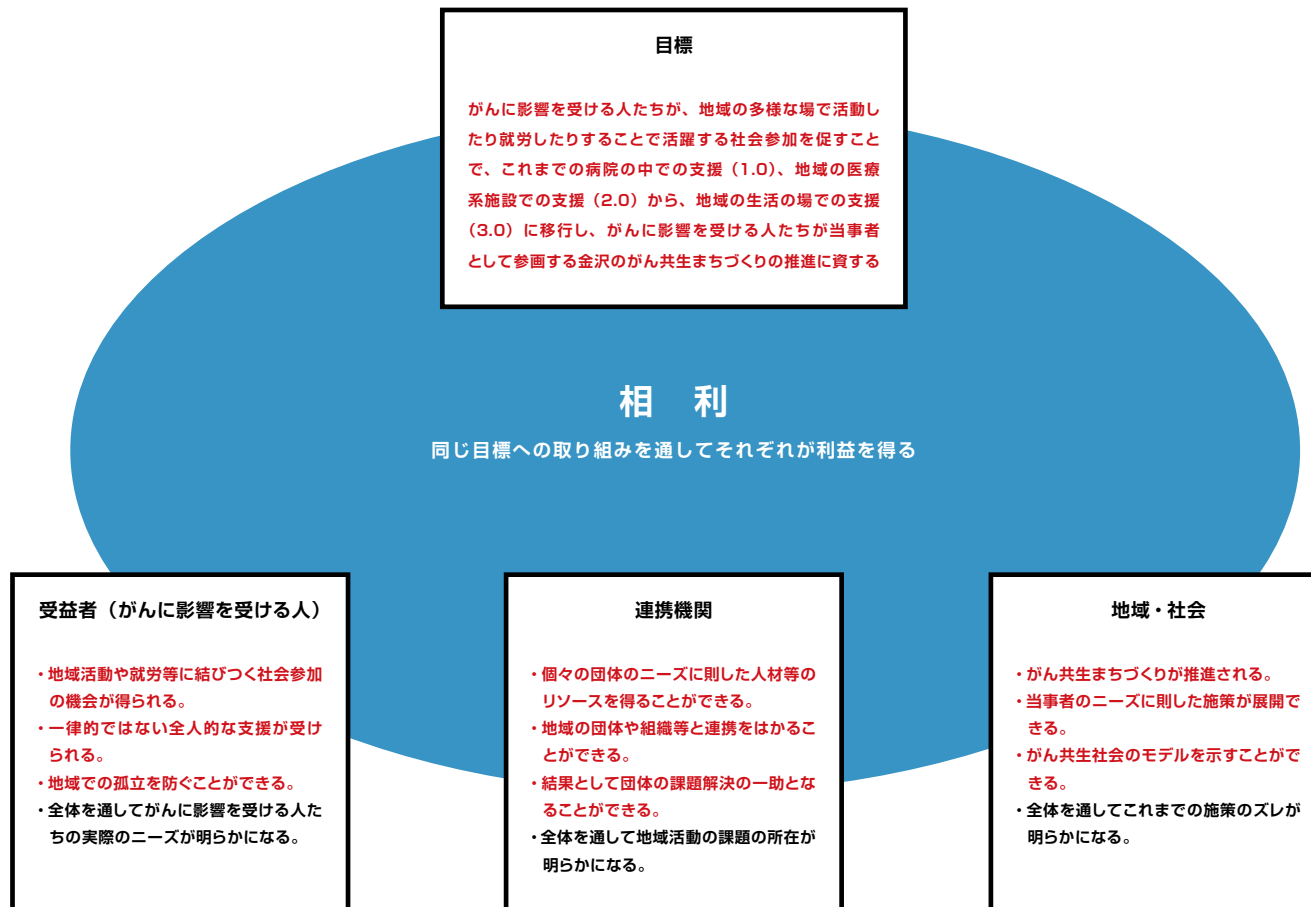


「病院」 + 「通院・療養」 + 「地域・生活」 エリア





事業を通して 実現したいこと



相 利

「連携するそれぞれの組織が同じ一つの目標を共有し、それぞれの立場でそれぞれに異なる方法でお互いに連携をしながら取り組むことで結果としてそれぞれの目的や課題の解決を実現していく」



!

・それぞれの団体でしたいことはバラバラであるが、一つの事業に取り組むことでそれぞれのしたいことが実現できる(相利)

・個々の団体の目標は、別の団体の目的を達成するのに有益である

・個々の団体のしたいこと、困難、課題などを把握し、どうすれば自分たちの団体の活動でそれが実現できるのか、解決できるのかを考える

・相手の「したいこと」を考慮せず、自分たちの「正しいこと」を一方向的に押し付けたり、啓発しようとししない



WAM オンライン学習会「地域共生社会に必要な連携とは何か？」

2021年12月1日 協力世界 松原 明氏

資料より引用して作成

目的：地域で活動する団体や組織、企業等の目的や役割、課題やニーズを共有し、互いの連携を深めて、協働して金沢がん共生まちづくりの場づくりに取り組む体制を構築していく。

内容：定期的な会議（ハイブリッド）

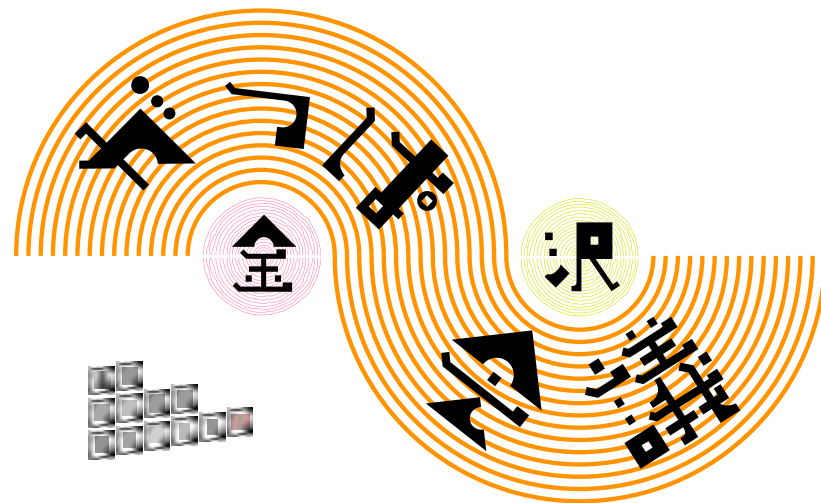
場所：元ちゃんハウス



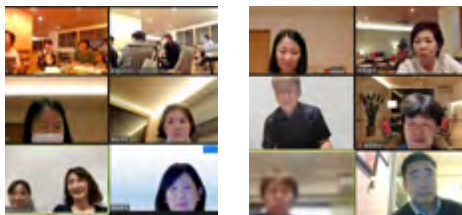
実施日：2024年6月、12月、2025年3月

対象：地域団体・組織、企業

参加人数：延べ63人（通年見込み）



ドアを開けて自分たちが地域に出る、ドアを開けて地域の人を迎え入れる、本事業の第一歩を踏み出すにあたり、「お互いがお互いの利益になる（相利）」という原点に立ち戻り、会議の名称を金沢弁で「一生懸命になる」という意味の方言を用いて「がっば会議」とした。これまでのヒトやコトのつながりの有無にかかわらず広く地域の人や団体に呼びかけた。



「がん患者」という言葉にある種の手応えを感じながらも、いざがっぱ会議の参加となると二の足を踏まれる事態に直面した。それでも毎回のがっぱ会議には多様な背景の地域の方が参加してくれた。それぞれの話を聞くなかで、それぞれにがんとの「接点」があることに気づいた。就労や就職、進学や教育、お金、生活など、幅広い接点だった。がんの当事者はがん患者だけではない、その人を取り巻く地域の人たちもがんの当事者なのだ。そんな認識が参加者の間で生まれた。大切な一歩だった。そこを出発点にこれからの具体を考えていった。

「がんの当事者はがん患者やその家族だけではない!」

「がっぱ会議の『声、』

(1) がんについての認識

がん患者と社会との間には、がんについての認識に複数のギャップが存在している。がん患者同士でも、それぞれがん種や治療等の背景が異なることから生じるギャップが存在している。これらのギャップを埋めるためには、キャリア教育やがん教育を通じて、若い世代に正しい知識を提供し、理解を深めることが重要ではないか。こうした教育の取り組みを職場環境にも拡張することで、がん患者が直面する地域での課題に対応できるのではないか。がんの診断を受けた後うつ病を発症するということを聞いて、がん患者のメンタルヘルスへの支援は重要だと考えている。地域社会で取り組みたい支援だと思う。

(2) 地域団体や企業との連携

企業からの寄附金という形の支援に関して、がん患者支援に関心がある企業でさえも、寄付支援先は限られているのが現状である。がん患者や家族の社会参加を進めるには、「企業や団体が、元ちゃんハウスを支援する」という形とは別の連携も必要ではないか。「がん患者・家族とともにある」という役割を担い当事者の声を聞いてきた元ちゃんハウスの経験を活かし、地域の企業や団体が抱えるがんに関連した課題を解決するための連携が、がん患者や家族の社会参加を推進することにつながるのではないか。連携にあたって、まずは、地域の企業や団体のがんに関する困りごと等の現状を把握するところから始めたいのではないか。

(3) ようこそカレッジプログラム

外部からの視点を取り入れてより効果的なプログラムにするには、プログラムの対象者（がん患者、家族、一般等）を明確にすることが有効ではないか。がん患者だけでなく、予防等を目的とした一般向けのプログラムもあったらいいのではないか。

(4) がん患者の就労

多くの企業にとって、がん患者が在籍していることは珍しくなく、企業もがんの「当事者」と言うことができる状況ではないか。がん検診を受けることは当たり前、というがんへの理解もある一方で、企業内ではがんについてはデリケートに触れづらいこととして扱われがちという実感がある。

柱 2

当事者会議

目的：がんに影響を受ける人たちを対象に、地域の多様な場での活動や就労など社会参加における課題や悩み、希望などを共有し、協働して金沢がん共生まちづくりの場づくりに取り組む体制を構築していく。

内容：定期的な会議（交流会&ナイト元ちゃんハウス）

場所：元ちゃんハウス



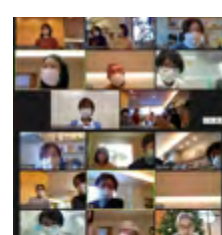
実施日：2024年4月～2025年3月の毎月1回

対象：地域のがん患者やその家族など

参加人数：延べ98人（通年見込み）

個別ミーティング 15回（通年見込み）

アンケート 34人

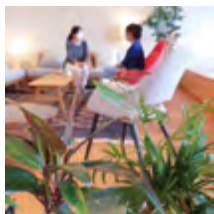


交流会&ナイト元ちゃんハウス

交流会は毎月第4火曜日の13:00から元ちゃんハウスとオンラインのハイブリッドで、ナイト元ちゃんハウスは毎月第1水曜日の19時から20時までZoomで開催した。



がん患者や家族から「社会参加」という切り口で治療や療養等と切り離して話を聴くことに難しさを覚えた。模索する中で段階を踏んで個別にミーティングを重ね、当事者会議につなげていくアプローチにたどりついた。さらにはがん患者の声を集める方法として無記名による郵送やオンラインのアンケートを行うこととした。具体的には4月から12月までの相談者延767人に対して、個別の事情に配慮し、本人の了解を得ることができた当事者に「社会参加」という切り口で話を聞くことを試みた。また、がん患者や家族、遺族などを対象に当事者アンケートを実施した（13人）。アンケートは本人の同意をとった上でホームページで内容を紹介し、金沢がん共生まちづくり3.0カレッジの教材として活用をはかっていった。



がん患者の「当事者」の声を聴くことはこれまでの経験値だが、「社会参加」という切り口で目的を持って聴くことはあまりなかった。いつもの相談や活動プログラムの延長線上にあると捉えていたが、いざ切り出すとなると当事者であるがん患者は多くの人がある意味「構えて、しまった。会議に参加したり、意見を述べたり、発言したりした内容が発表されることに抵抗を感じる人もいた。がん患者にとって治療や療養と生活や社会参加はつながっていると気付かされた。

「がん患者にとって治療や療養と生活や社会参加はつながっている！」

「当事者会議の「声、(アンケート)」

場

病院で話せないことをいつでも相談できたり、ただお話を聞いてもらったりする場があると気持ちも楽になる。治療中、休職して家で独りだと心細く、不安ばかりよぎりました。人の交流が有り難く、支えとなりました。

告知を受けてから治療期間、治療後も孤独で悶々とした日々を過ごしました。もし近くに病気のことを話せる場所があれば、もっと精神的に安定できたように思います。

立場

同じ癌種はもちろん違う癌種でも患者同士だとなぜか安心して話できたり、行動できたりします。

同じ年代で同じような経験をした方との繋がりを求めていると思うし、必要だとも思う。

同じ病気を経験した方と出会えたらもっと気持ちが楽になったと思います。

抗がん剤治療による副作用で脱毛しているときは、外見が変わってしまった自分を見られることが辛く、人に合わなくなりました。鏡を見ることも辛く自己嫌悪になり孤独を感じていました。

イメージ

がんのイメージが悪い。

職場内のがんに対する理解不足によってトラブルが起こればと思います。

再就職するときに、がん治療中または経験者ということ

が障壁になるように感じることがあります。

パートや契約社員などの有期雇用の場合は戦力外とみなされて契約終了になることが多いのが実情のように感じています。

新しい風

新しい知識や体験、人に限らずいろいろな出会いによって今まで知らなかったことや興味がなかったことにチャレンジしたくなると思います。

趣味等で何かに集中することも気分転換になります。治療中は、生きている意味や楽しみが何も感じられなかったので気晴らし出来る場所が必要だと思いました。

「柱1・柱2 参加者の声」

柱1地域連携会議と柱2当事者会議の議論からアンケート案が生まれた。より多くの当事者や地域の人の声を集めるために匿名性を担保すること、郵送だけでなくオンラインの回答もできるようにすること、回答のしやすさを考え設問を絞り、理由を問いかける形にすることなどを考えた。地域団体アンケートは7月から郵送、オンラインで順次実施し、2月現在で21件の回答を得ている。*ようこそ、カレッジのホームページでは掲載の許可を得られた内容を順次公開している。



アンケートの*声、(地域) 抜粋

- ・地域には、がん患者さんのための施策を考えている行政や、ヘルスケアに関わる人々など様々な資源があるので、中間支援団体がうまくコーディネーターとなることにより、地域でのサポートが受けられる場が増えていく。
- ・企業や組織が両立支援を理解するの必要を感じました。
- ・地域全体でどこでも同じケアが受けられる体制作りが急務。
- ・いくつかの拠点があることは知っているが、身近とはいえない。一歩踏み出す勇気が必要であり、そこを突破できればサポートは充実しているように思う。
- ・がんに対する知識と理解、そしてサポートは、人(団体)ごとに大きな差がある



<https://yokosocollge.com/category/koe/>

活動を知るからこそ、もっとつながりが必要になる。

以前から「がんとむきあう会」の活動には注目していました。毎年多くのイベントを企画し、活動されていることは知っていましたので、素晴らしいことをされているなと思いつつも、参加させていただく機会はこれまでありませんでした。ある時に地域連携会議に参加するようにとお声がけいただきましたので、何の会議なのか分からないまま参加しました。そこで団体の課題や、会議の意味をお聞きし、まだまだがん患者と家族が孤立しがちであること、だからこそ地域連携の必要があることを知りました。また、支援者のいろんな活動を聞き、素晴らしいなと思いながらも、もっと繋がっていく必要があるなと感じました。

それから文化祭にも参加しました。参加して思ったことは、気楽でフランクな場、注目を集める場、だからこそ交流が生まれ、一歩踏み出してみようと思う人が生まれるのではないかと感じました。大変だったと思いますが、素晴らしい文化祭だったと思います。実際に図書館に来ていた人が、「これ何ですか?」と受付に聞いてました。その後、その方は後ろから入り、座って話を聞いているのが印象的でした。

私は私が就職支援の活動の場で出会った、がん患者の方とのエピソードを紹介してもらいました。私自身がその方の、がんが発覚してから行動、その後の生き方に、勇気をもらっていましたし、多くの方にぜひ知ってほしいと思っていました。ご紹介出来る機会をいただいたことには感謝いたします。これからも応援していますし、また繋がっていきましょう。



福田 乗さん 株式会社 歩 (パソコン道場 楽)

柱3

〰ようこそ、カレッジ

目的：がんに影響を受ける人たちが、多様な場での活動や就労などで活躍できる社会参加を地域に促すために、がん患者や家族と地域のそれぞれの立場の人たちが共に学び、必要な知識と実践のためのスキルやノウハウを身につけ、具体的な一歩を踏み出すことができるようにする。

内容：スクール形式の学びの場。「がんと共に生きる」をテーマに、がんに影響を受ける人たちの社会参加を可能とする多様なカリキュラムを用意し、各自の希望に応じて知識やスキル、ノウハウを身につけ、それぞれの立場における個々の課題を解決できる内容とする。

場所：〰ようこそ、カレッジ（元ちゃんハウス）



実施日：週2回および第一土曜、随時の課外活動

実施回数：136回（通年見込み）

対象：地域のがん患者やその家族、地域団体、組織、企業等の関係者、医療従事者、行政関係者等

参加人数：がん患者等延べ800人、団体・企業等延べ60団体



柱1「地域連携会議」と柱2「当事者会議」の内容を踏まえて、「金沢がん共生まちづくり3.0カレッジ」の中身の作成と実践に取り組んだ。第1期と第2期に分けることで、まずはスタートを切ることを目的にした。第1期は柱2のがん患者さんの個別ミーティングの声をもとに社会参加の下地となる「生活の充実」を目標にしたカリキュラムを作成し、4月から段階的にプログラムをスタートした。第2期はがん患者さんだけでなく第2の当事者である地域の人たちも対象に、より「社会参加」に踏み込んだ内容のカリキュラムを作成し、9月からプログラムをスタートした。

第1期

2024年4月～

金沢がん共生まちづくり3.0 カレッジの
カリキュラムの名称を「広く地域の人を
迎え入れたい」という願いと「気軽に参
加してほしい」という期待を込めて「よ
うこそ、カレッジ」とした。第1期は、
2024年4月に開講。「がんと共に生き
る」をテーマに、がんに影響を受ける人
たちの社会参加を可能とする多様なカリ
キュラムを用意し、各自の希望に応じて
知識やスキル、ノウハウを身につけ、そ
れぞれの立場における個々の課題を解決
できる内容とした。

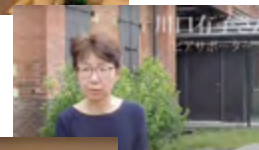


外部の講師を招く他に、参加者であるがんに影響を受ける人や地域のそれぞれの立場の人たちが自らの経験や課題に基づいた「講義」をするスタイルも積極的に取り入れた。課外活動として「ようこそ、カレッジ倶楽部」を設けて、趣味のサークルでの参加者同士の交流もはかっていった。

第2期

2024年9月～

プログラム第2期の中身と実践に取り組んだ。オンラインによるアーカイブを含めたeラーニングの講座を用意。外部の講師を招く他に、参加者であるがんに影響を受ける人や地域のそれぞれの立場の人たちが自らの経験や課題に基づいた「対話」をするスタイル（動画作成）も積極的に取り入れた。柱1及び柱2の参加者を中心に各方面に具体的なカリキュラム作成を依頼した。広く参加者からの「授業料」を徴収することで学びのモチベーションの維持だけでなく、運営の持続性にもつとめた。

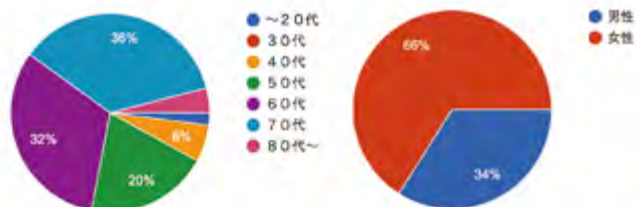


がんとともに生きる人たちは、病院や療養の場ではなく、普段の暮らしの場で、どんな問題に直面したり、悩みを抱えたり、不安を感じたり、どんなことが支えになったり、気持ちの助けになったりしているのか。地域で活動する人たちは、がんとともに生きる人たちの地域の場での交流や活動、ボランティア、就労といった社会参加を推し進めるためにどんなサポートを必要としているのか。地域でがんとともに生きる「当事者、たちの声を誰もが視聴しやすい動画の教材を作成した。

「柱3 アンケート」

金沢がん共生まちづくり 3.0 カレッジに参加頂いた方を対象にアンケート（オンライン）を含むを実施した。

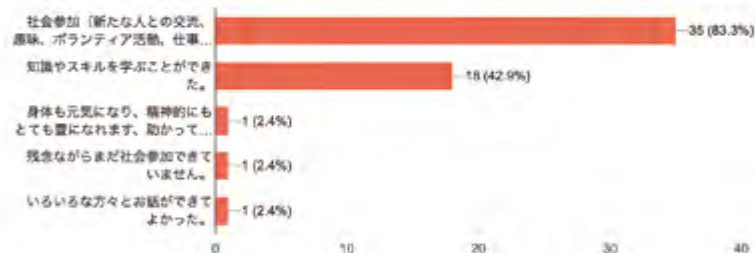
年代・性別



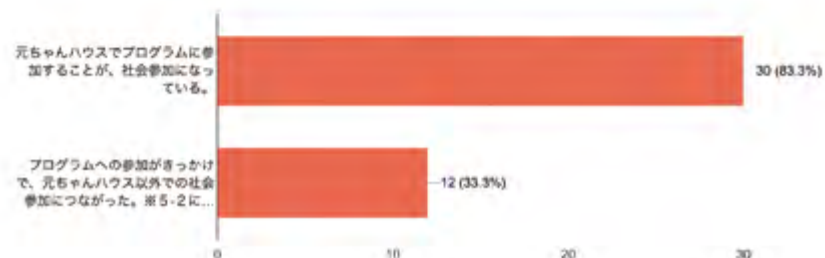
お立場



参加したプログラムは、何に役立ちましたか？



どんな点が社会参加の機会になりましたか？



アンケートの「声」

【社会参加の活動】

- 「人との交流」
- 「毎週開催のオンラインがんサポ喫茶への参加につながった」
- 「高齢者教室（地域、町内会など）」
- 「地域での活動（主に町内）」
- 「知人が増えた」
- 「ピアサポーターとしての活動」
- 「ボランティアやピアサポート活動につながりました」

【あったら良いと考えるプログラム】

- 「幅広い人が参加しやすい場所の提供」
- 「新たなつながりが出来るようなゲームの会」
- 「趣味全般の様々な触れ合いがあってもよい」
- 「食や食にまつわる課題や悩みをお話する会」
- 「社会参加ができる企画があってもよいかも」
- 「がんではない人も気軽にどんな所か体験できるような感じがいいと思います」
- 「地域の中高生との交流」
- 「メンタル面のサポートをしてもらえたり、講演など」
- 「自分の経験を活かせる場があると嬉しい」
- 「患者会同士の繋がりを持ちたい」

【自由記載】

- 「今のところこの空間にすることで、心おだやかになります」
- 「日ごろ医師などに聞けない素朴な疑問をたくさん相談することが出来ました」
- 「ボランティアが参加できるターミナルの患者さん支援の形が出来たら良いと思う」
- 「再発してから家に籠りがちなので外に出るきっかけができた」
- 「同じ病気を経験した方と話す機会があるのは安らぐ気がする。」

目的：本事業参加者と関係者の目標となる具体的な成果発表の場とするとともに本事業の取り組みを広く地域に発信をする。

内容：参加者と関係者が主体となり、広く市民に活動の成果と明らかになった課題等をアピールするイベントを開催する。がんに影響を受ける人たちの社会参加における課題やその取り組みの成果、事例報告等の他に、1DAY カレッジの開催など市民参加型の催しを展開する。

場所：石川県立図書館 だんだん広場、元ちゃんハウス



実施日：1月11日、1月21日(火)～1月27日(月)

実施回数：1回及び7日間

対象：金沢市民、地域のがん患者やその家族、地域団体、組織、企業等の関係者、医療従事者、行政関係者等

参加人数：411人(1月11日)、430人(通年見込み)



「自分にとっての社会参加」をテーマにがんの当事者や連携する団体・企業の講演や体験、出展を行った。参加者にとって、社会とのつながりを再確認し一步を踏み出す転機となり、地域社会の一員として活躍する重要な機会となった。当会拠点外での開催を通じて、社会参加を求めながらも様々な理由で当会拠点に来られない人々と出会い、新たなつながりを創出することの必要性が明らかになった。

「見まっし、来まっし 一歩踏み出す 文化祭」

スケジュール

【がんとともに生きる人の社会参加を支える】

“企業・団体で支える、	宮崎 典子	越屋メディカルケア
“キャリアで支える、	高田康子	キャリアカウンセラー
“患者会で支える、	出戸和俊	石川喉友会
“ここで支える、	今井昌夫	松原病院医師
“地域と人で支える、	福田乗	株式会社 歩
“高校生で支える、	ふくい SMILE アクティボ	
“コミナスで支える、	加藤瑞穂	ALLINUS オリナス
“サークルで支える、	クロスピンク / レイモミ	

【体験!“ようこそ”カレッジプログラム】

“ルーシーダットン、	村上美矢子
“体メンテナンス、	花岡修子
“アロママッサージ、	川上由夏
“ヨ ガ、	北市 浩子

【地域のつながり】

アロマミスト販売	EarthRing
パン・焼き菓子販売	あんど
綿菓子・駄菓子販売	ねこじゃらし

金沢がん共生まちづくり 3.0 に関わらせて頂き、初めてお会いした方やお話し出来た方が多くいらっしゃいました。聞いて語ってまた聞いて、元ちゃんハウスを後にする…を繰り返すうち「運動の技術」「元気さ」を伝えながら、楽しさや安らかさ、時には切なさ、そして生きた知識まで沢山のものを逆に与えて下さっていました。良い例が 1/11(日)に開催された“一歩踏み出す文化祭”です。「体メンテナンス」としてプログラムを担当させて頂きましたが、当日の会場は明るく暖かく、リラックスした表情のお客様でいっぱい!! 緊張していた私と、おしゃべりを交えながら笑顔で一緒に体操をして下さいました。抗がん剤治療中でも出来ることがある、出来る事が有難い、そして誰かと一緒にこんな嬉

しい、と思いながら帰路につきましたら不意に涙が…。旅立った家族や仲間のことが思い浮かび、“今日の私を見て欲しかった、隣に座って話したかった”と嬉しいのに寂しくて、泣き笑いしながら帰ったのでした。それ以来、生意気なようですが「来て良かった、話せて良かった」と思っただるプログラムを継続したい! ピアサポーターとしていろんな想いをやり取りできる人になりたい! と考えております。スタッフの皆様、いつも支えて下さりありがとうございます。今後共宜しくお願い致します。

花岡修子さん がん当事者インストラクター



これまで、医療関係の仕事に携わることが多く、病や健康に関心はありました。自分自身や親兄弟も健康で、幼い頃からあまり病院には縁のない生活を送ってきました。6 年前に大腸がんの手術と抗がん剤治療をし、現在は経過観察中です。治療中は心身ともに辛かったです、その時にはがん患者の支援の場があることは知りませんでした。少し気持ちに余裕ができ、視野も広がって現在様々な活動に参加できているのだと思います。文化祭にも参加させて頂き、沢山の方にお越し頂き充実した一日を過ごすことができました。がんに携わっている方はもちろん、図書館内だったのでついでにふらりと見ていって下さった方いらっしゃいました。がんに全く関わりのない方は、「がん」と聞くと、重い感

じを受け関係のない者は足を踏み入れられない領域とされているかもしれません。もしがんに罹患した際にあんな場所があったなとか、周りにがんで苦しんでいる方がいればこういう場所もあると伝えてくださるよう、文化祭のようにどなたにでも目に入り、参加してみて、敷居が高くないことを広めていくことが必要なかなと感じました。私自身、ピアサポーターとしてもっと経験を積み、勉強していかなければならないと思っています。百人百様の考えがあると思いますが、ガン患者にもそれぞれの想いがあると思います。柔軟な対応ができる「3.0」を希望したいです。

川口有子さん がん当事者





柱1・柱2の参加者、`ようこそ。カレッジの参加者、各種相談の当事者など、つながりのあるがんに影響を受ける人たちが、社会参加の第一歩となる場として「金沢がん共生まちづくり 3.0 カレッジ文化祭」に参画した。がんに影響を受ける人、それぞれが、それぞれのカタチで「自分にとっての社会参加」を表現した。

柱 5

交流会

目的：本事業における 1 年の活動を総括し、その内容と成果を地域のがん患者やその家族、地域団体、組織、企業等の関係者、医療従事者、行政関係者、マスコミ等にアピールするとともに、次年度からの活動への協力をはかる。

内容：1 年間の活動で明らかになった課題を共有し、今後の継続のための具体となる論点を導き出していく。同時にプレス発表会も開催する。

場所：石川県立図書館 だんだん広場



実施日：2025 年 3 月 8 日

対象：地域のがん患者やその家族、地域団体、組織、企業等の関係者、医療従事者、行政関係者、マスコミなど

参加人数：50 人（見込み）

全体

能登地域の被災者への取り組み

本事業の一環として能登地域の被災者を対象とした支援活動に幅広く取り組んだ。柱 2 の当事者会議、柱 3 の「ようこそ、カレッジプログラム」、柱 4 の文化祭では能登地域の被災者が参加した。元ちゃんハウスが主催するかたちとして避難場所でも生活をしている方を対象にしたイベントを企画した。

持続的な物資の支援のハブとして全国から寄せられる物資の仕分けや供給の中継地点としての役割や直接の配送など臨機応変なリクエストに対応した。また、各地の支援団体やボランティアの窓口としてこれまでの取り組みの中で培ってきた各種団体とのつながりをベースに現地とのコーディネートに取り組んだ。



「お出かけ元ちゃんハウス」のプログラムとして能登地域の方を招いた書き初めを開催。今年の揮毫「平穏」に願いを込めた。輪島復興を願って輪島塗のお椀でいただくぜんざいや参加者から復興義援金の寄付を集めた。

令和 6 年能登半島地震の被災者の皆様
に対する支援について

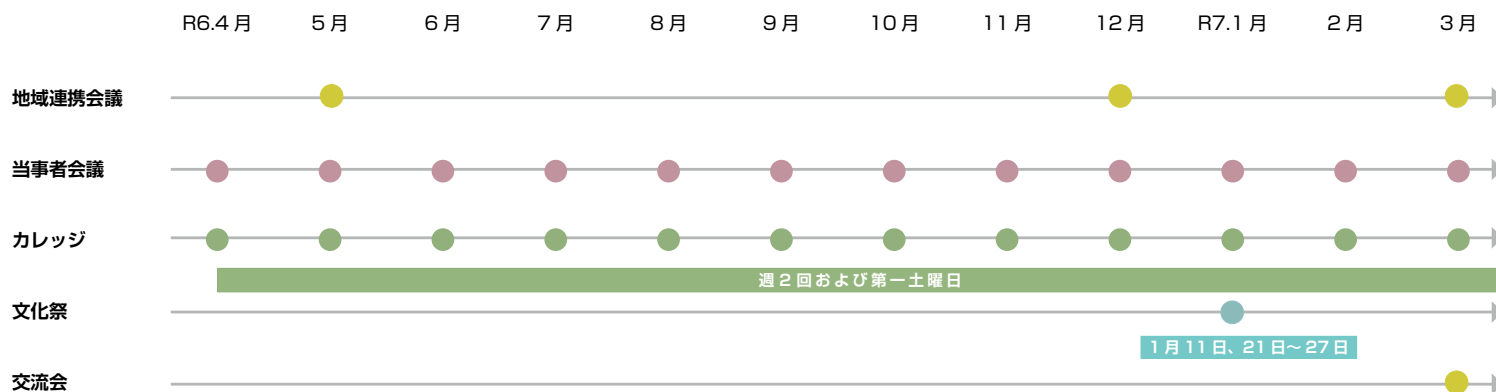
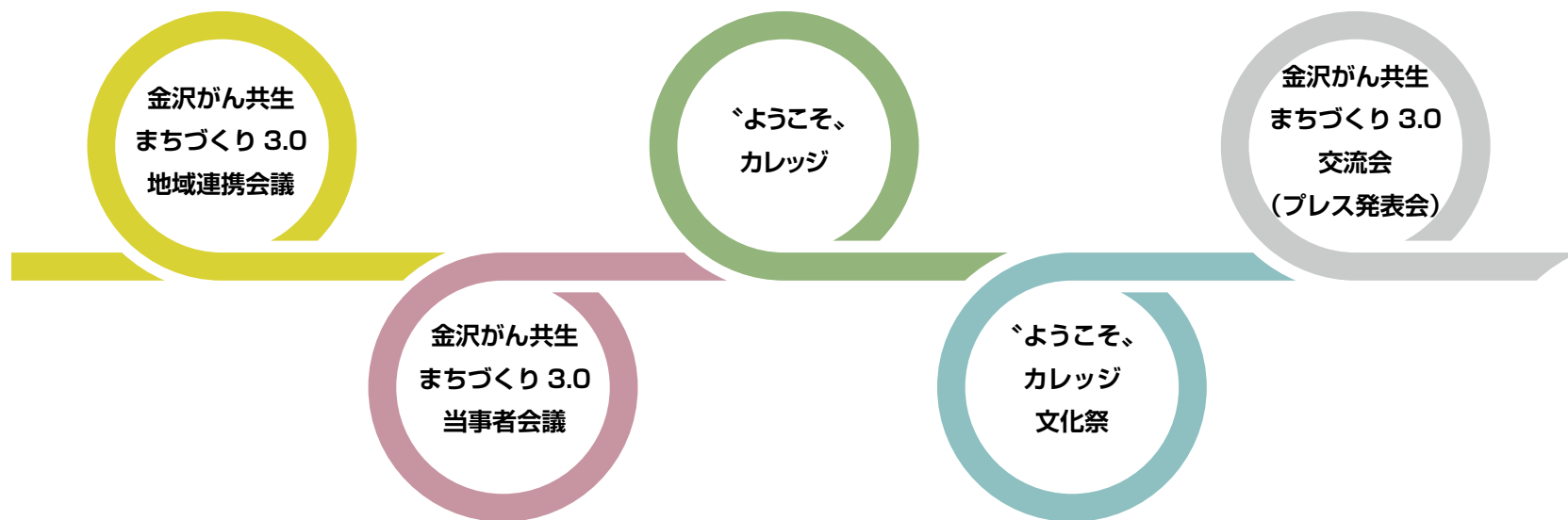
＝元ちゃんハウスで じんのび＝

令和 6 年 1 月 1 日の能登半島地震により被災者の皆様は被災地から、県内各地や避難先へ避難されています。被災地では物資の不足や生活の不便が深刻化しています。元ちゃんハウスでは、被災地の皆様へ物資の支援や生活のサポートを行っています。被災地の皆様へ物資の支援や生活のサポートを行っています。被災地の皆様へ物資の支援や生活のサポートを行っています。

金沢市内の避難場所のひとつである辰口福祉会館で避難生活をしている方を対象に元ちゃんハウスの見学や食事、近郊への散策などのイベントを企画した。



震災直後の奥能登から寄せられる緊急のリクエストへの対応、被災状況が明らかになる中での持続した物資の供給、DC-CAT、IT DART、日本栄養バトネット、全国訪問ボランティアの会キャンパスなどの支援団体のサポートや全国から寄せられる物資の仕分けと供給の中継地点としての役割を担った。





事業後の展望



事業継続の計画

第1に本事業は第4期がん対策推進基本計画における「がんと共生できる地域社会」を目指すところから、当法人が金沢市と金沢医療センター及び金沢大学附属病院とそれぞれに締結している3者協定と結びつけていくことで行政でのモデル事業化に働きかけ、協力を仰ぎながら事業の継続を果たしていく。

第2に本事業は医療の分野だけではない地域の多様な団体や組織、企業等と連携することから、地域にヒト・モノ・カネ・情報の流通が生まれる。その結果として地域が活性化しさまざまなリソースが蓄えられることで事業継続の下地がつくられると考える。

第3に本事業は地域の団体や組織、企業などが直面している人材不足の課題解決の一助となることから、〝ようこそ、カレッジでは特に参加する企業から協賛金を広く募る仕組みを組み入れることで、継続した活動の原資とする。また、本事業で新たに構築するeラーニング等のシステムは持続した利用や他地域でのプログラムの再利用などを可能とするものとする。



事業後の展望

本事業を通してがん患者とその家族が活躍できるまちづくりに地域全体として取り組むことで、がん患者やその家族に対する新たな意識が地域の人たちの間に生まれてくることを期待したい。助成終了後にはそうした意識を地域の文化として醸成していくことで、事業の持続と発展に取り組んでいきたい。

具体的には第1に地域の団体や組織、企業との連携した活動を下地にして地域の住民レベルにまで活動の幅を広げていく。第2に〝ようこそ、カレッジの場を医療従事者の教育や研修の場として活用することで医療従事者の連携をより推し進める。第3に事業の取り組みを成果として行政との連携を深めモデル化につなげていく。同時に事業のモデル化を推し進めることで他地域での広域展開も視野に入れる。

こうした取り組みから、将来的には地域に正しいがんの理解に基づいた、がん患者とその家族が、がんになっても安心して生活し、尊厳を持って生きることのできる地域共生社会が実現できるものと考えている。



2年目の計画

本事業計画の2年目の骨子は、1年目の事業成果をベースに本事業計画以外の地域において広域展開することである。これまで全国の各地域から寄せられている支援の場所の立ち上げや持続した運営のノウハウを求める団体と連携をとり、本事業で培ったeラーニングシステムなどのリソースを再活用するなどして、各地域での実情に応じたスタートアップを柔軟に支援していきたい。

柱となる内容については1. 支援団体の全体会議（年間4回）、2. 個別の団体への支援（随時、現地への視察訪問、オンライン会議、リソースやノウハウの提供など）、3. 全国各地の取り組みをサマリーし（全体会議にあわせて年4回）、行政やメディア等に発信（プレス発表会、プレスリリースなど）する。

2年目における本事業地域に留まらない取り組みにより、本事業の内容をよりブラッシュアップし、行政におけるモデル化につなげていきたい。

治療をしながら仕事を続ける方の相談が増えてきている…。金沢市役所の産業医として世の中を眺めたときに実感することです。ひと昔前とは様相が変わってきています。テレワークが入ってきたことで、病気を抱えていても、無理なく、治療をしながら仕事を続けることができます。社会との接点が途絶えることがありません。それはとても良いことだと思います。産業医としてもそうした世の中の変化に対してさまざまな施策づくりに取り組んでいます。がんの患者さんであれば手術後には退院し、化学療法などは通院で行うことが主流です。この場合には通院ごとに1日単位で病休を取得できるようにしてあげる。制度や仕組みを少し変えることでその人の治療と生活を支えることができます。

行政が取り組むのは健康づくりや病気の予防など、地域住民の健康の保持増進や公衆衛生の向上を目的とした地域保健対策です。市民をひとりの生活者として捉えたときのスピリチュアルなケアやこころの支えという部分にはなかなかアプローチできません。病気や治療については専門性が高く、一人ひとりに対応し

た個性性が求められるからです。そうした行政が手を出しにくいところをサポートしてくれる。それがNPOやボランティアの組織など地域で活動する人たちの存在なのだと思います。自助ではできないことを互助や共助で行う。スピリチュアルな部分ではそれがとても重要です。

行政と地域で活動する人たちが「手をつなぐ」ことが大切であると思います。もっとお互いがお互いを認め合う。顔見知りになる。行政のなかに医療について分かっている人がいれば地域で何が必要なのか、組織のなかで通訳となって伝えることができます。地域で活動する人たちは基幹相談支援センターや地域包括支援センター、児童家庭支援センターなど、行政が地域の窓口として設置している機関と連携をする。そこを接点としてお互いの交流が生まれるのではないかと思います。金沢がん共生まちづくり3.0の取り組みがそうした一歩となり、モデルとなることを期待しています

行政と地域の団体が手をつなぐ、一歩。

金沢市 福祉健康局 担当局長
(兼) 保健所長
越田理恵





金沢がん共生活まちづくり 3.0 運営体制

西村詠子	看護師、がん経験者・家族・遺族
櫻井千佳	管理栄養士、がん専門療法士
米森直子	ピアサポーター、クロスピンク代表
毛利葉月	看護師、元養護助教諭
任田和子	管理栄養士、金城大学非常勤講師

認定特定非営利活動法人 **がんとむきあう会**

〒920-0935

石川県金沢市石引4-4-10 越屋メディカルケアビル

TEL：076-232-5566 / FAX：076-254-1248

MAIL：info@genchanhouse.com

ホームページ

元ちゃんハウス：<https://genchanhouse.com>

法人：<https://gmkn.or.jp>

facebook：<https://www.facebook.com/gmk20>

メルマガ
配信中です!

